

北海道標茶高等学校

問い合わせ先: 015-485-2001

員3名, ボランティア部顧問など)
生徒: 釧路湿原再生プロジェクト参加生徒
(環境研究グループ), 環境系列選
択科目履修生徒, 環境ボランティア
参加生徒

I 学校の概要

1 児童生徒数, 学級数, 教職員数

生徒数 228名, 学級数 8, 教職員数 29名

2 地域の概況

北海道の東部に位置する標茶町は, 国立公園である釧路湿原の湿地帯が分布し, 周辺の自然は多様性に富んでいる。山間部には針広混交林が広がり, マツやミズナラなどの樹木が茂り, 低地には湿地が広がり, ヨシやスゲ, ヤチボウズなど湿原特有の景観を見ることができる。本校にも後背地に軍馬山と呼ばれる森林や水辺があり, 敷地内ではタンチョウが飛ぶ姿が見られる。

標茶町では, 地域の児童生徒が身近にある釧路湿原を環境学習の場として活用し, 自然環境の保全や生態系について考える機会とするとともに, 環境教育の推進に努めているが, 主幹産業である酪農業などの産業活動と自然環境の保護の両立が大きな課題の一つとなっている。

3 環境教育の全体計画等

本校は総合学科であり, 総合選択科目群として, 「環境」という系列を設定し, 地域の自然環境に学び, 自然の保全や活用など環境について広い視野を持つ産業人の育成を目指している。環境に関する教科・科目では, 水質の分析方法や湿原の成立などについての知識を習得するとともに, フィールドワークを取り入れた体験活動を通して, 理解を深める学習を進めている。

また, 本校の環境研究グループが, 釧路湿原再生プロジェクトに参加しており, 地域全体の環境教育に関する取組の中核になっているほか, 多くの生徒が地域の環境教育に関わる行事に参加している。

II 研究主題

釧路湿原の保全のための水質浄化の発展的な取組と本校の地域環境教育の指導的役割の推進

III 研究の概要

1 研究のねらい

本校がこれまで取り組んできたビオトープ(「ミニ湿原」)における水質浄化に関する調査研究の深化, 発展を図る。また, 地域の教育資源である釧路湿原等を活用した環境教育に関する学習の成果を近隣の学校に普及し, 引き続き地域全体の環境教育の発展に貢献する。

2 校内の研究推進体制

(1) 研究推進体制

教職員: 環境教育委員会の設置による指導体制の確立(理科教員3名, 農業科教

(2) 観測体制

釧路湿原再生プロジェクト参加生徒を中核メンバーとして観測に取り組むほか, 環境に関する教科・科目の履修者が観測に取り組む。

(3) 観測機器などの設置状況

最高最低温度計, 水質測定器, pHメーター, 捕虫網, タモ網, 透視度計, 土壌分析機などを常備している。

3 研究内容

(1) グローブの教育課程への位置付け

環境に関する科目において, 科学的な調査を行うことにより自然について科学的に学ぶ機会としている。また, 生徒の情報発信の機会として活用し, プレゼンテーション能力やインタープリテーション能力を高める方策として位置付けている。

(2) グローブを活用した教育実践

- ① 学校敷地内の水質及び生態系の調査・研究
透視度, 水質, 牧草地の土壌, 周辺の植生, 気温など
- ② 地域の小学生を対象とした環境学習会及び事前学習会の実施
- ③ 町内の京都大学演習林での学習会への参加

IV 研究の成果と第2年次に向けての課題

本校の敷地内の水質や土壌成分, 年間の気温調査や61種の植物の標本化などを実施したことにより, 自然環境に対する関心を高め, 積極的に学ぼうとする姿勢や態度を身に付けさせることができた。また, 高校生をインタプリターとするビオトープにおける小学生向け環境学習会の実施により, インタプリテーション能力を身に付けるさせることができた。

本研究の活動内容や測定データなどについて積極的に発信するとともに, 地域からの評価や意見を踏まえ, 研究内容を一層充実させ, 地域全体の環境教育を推進する必要がある。

V 研究第2年次の活動計画

- ① 調査に加えた項目の継続的な測定を行うとともに, 観察力の育成を図り, 身近な自然環境をとらえる視野を広げる。
- ② 植生調査として, 被度測定を行い, 客観的な測定データを加え, 科学的に自然環境をとらえる能力を養う。
- ③ 地元の小学生を対象にした環境学習会を継続するとともに, 中学生及び町民に向けた発信活動を行う。
- ④ グローブに発信した取組や成果の様子を学校のホームページや学校だよりに掲載する。
- ⑤ 研究成果を自治体, 環境団体及び地域住民と共有し, 連続性, 発展性のある地域ぐるみの取組とする。